

いわき市のおいたち

●歴史 ●発展経過と現状

●歴史

当地方では、太古の時代から私たちの遠い祖先にあたる人たちが住み、狩猟や漁業など採集生活を営みながら、温暖な気候と豊かな自然に支えられて立派な文化を築いていました。この様子は数多くの遺跡から分かります。

有史の時代に入り、当地方には、中央政權の国造が置かれ、東北地方を治める拠点の一つとして重要な地区であったようです。

時代は、やがて武士の世となり、鎌倉、室町及び戦国時代などを経て、近世の江戸時代へと歩むこととなりますが、その間、11世紀の中頃から、当地方は、岩城氏が統治することとなり、現在の「いわき」市への基礎づくりをしました。

江戸時代に入ると、磐城平藩を中心に、湯長谷藩、泉藩、幕領として、この地は治められ、明治維新に及びます。

明治16年には平町が発足、明治22年に町村制がしかれると、平が正式に町制をしいたのをはじめ、小名浜、四ツ倉も町制をしき、その他の地区は村制をしきました。その後、昭和12年には平市が、また昭和28年に公布された町村合併促進法によって、29年には磐城市、常磐市、内郷市が、30年には勿来市が誕生しました。一方、町村でも遠野、小川が町制をしき、その他の地区も合併が進み1市10町21村が、5市3町4村になりました。昭和37年、新産業都市建設促進法の施行に伴い、常磐地方の市町村が合併して新産都市を建設することを約した結果、39年に指定を受け、41年10月1日に5市3町4村に双葉郡の久之浜町と大久村を加えて合併し、ここにいわき市が誕生しました。

●発展経過と現況

したがって当地方は、平、磐城、勿来、常磐、内郷の旧5市がお互いに連携を保ちながら大きな都市形態を構成し、外部を九つの旧町村部が波状的に伸びています。

平は、古くから城下町として、また政治、経済、産業、文教、交通の中心地として繁栄してきました。

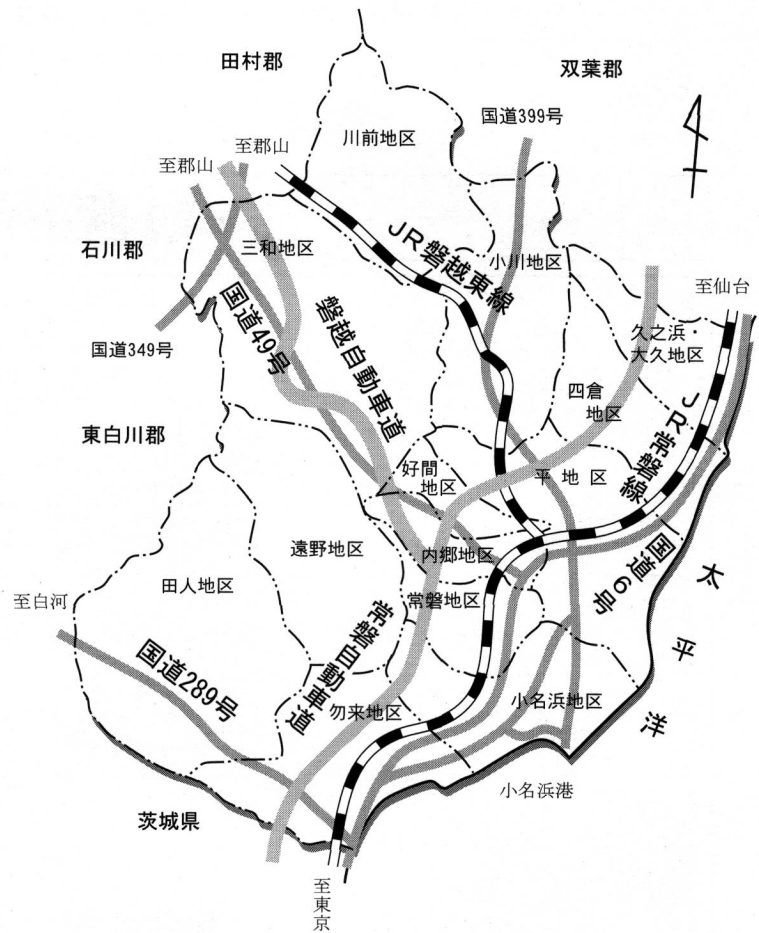
内郷は、常磐炭田の発祥の地として炭鉱とともに栄え、常磐は、常磐炭田の中心地として、また奈良時代からその名が知られ日本で最大級の揚湯可能量を誇る温泉地として知られています。磐城は、小名浜港と工業・漁業のまちとして、勿来関で有名な勿来は、海水浴場や工業のまちとして発展を続けてきました。

当地方の産業は、豊富な石炭資源と港、即ち、常磐炭田と小名浜港を中心に発展してきました。石炭産業の斜陽化によって、一時は隆盛をきわめた鉱業地帯も現在は、工業再配置により工業団地に変わろうし、新しい企業が操業しています。

石炭産業の恩恵によって発展してきたいわき湯本温泉も常磐湯本温泉株式会社を設立して温泉事業を継続、発展させています。

国際貿易港として外国船や大型タンカーでにぎわいをみせている小名浜港は、7号ふ頭まで完成し、外国貿易コンテナ定期航路も開設されました。

小名浜・勿来臨海工業地内、内陸部の好間中核工業団地は工業用水、電力、輸送、工業用地など立地条件を十分満たし、大手企業の進出が盛んです。また、農林業経営の安定と生産性の向上を図るため、生産基盤の整備と協業・機械化を促進。適地適作を基調とし、生産から流通、販売まで一元化した事業を展開しています。



方位	東経	北緯	地点	距離
極東	141° 00'	37° 09'	久之浜町久之浜字館ノ山地先	東西39.00km
極西	140° 34'	36° 59'	田人町貝泊字井出地先	
極南	140° 47'	36° 51'	勿来町九面馬の道地先	南北51.50km
極北	140° 44'	37° 19'	川前町小白井字芋嶋地先	